

日本体育学会
体育哲学専門領域

会報

Vol.16 (2), August, 2012

記事

巻頭言
体育哲学考
私の研究
書籍紹介
箱根合宿研究会に参加して
運営委員会からのお知らせ
次号予告

巻頭言

懸命な「打ち」

小林 日出至郎(新潟大学)

「『打ち』の鍛錬は何故、価値があるのか」。剣道における問いである。

剣道において「怒り」に囚われた打ち、殴る動作は否定される。剣道の試合における有効打突は、「充実した氣勢」「適正な姿勢」「竹刀の打突部で打突部位を刃筋正しく打突」

「残心あるもの」という4条件を満たす一本の「打ち」である。このような動作は、「公明正大な」(「剣道試合審判規則」第1条(本規則の目的);全日本学生剣道連盟)運動動作を基底とし、相手を殴る運動動作とは異なる。日常において何らかの理由により激怒し、思わず相手の頭部を殴ることはあるかもしれない。しかし、剣道ではこのような動作が現れる場合、公正を害する行為として否定される。

人間の怒りは、時代と地域を超えて、どこにでも現れる。怒りによる身の破滅や悲劇は無数にある。私たちは、怒りに囚われない生き方の大切さを知っている。しかし、心の平静さを保つことは難しく、日常の生活や職場で怒りたくなることが多々ある。心が疲れている時、課題が困難な時、思わぬ事態に遭遇した時等、直ぐに怒りが込み上げる。如何なる状況下でも、怒りに支配されず、その場に依じた冷静で適切な行動を成したいと誰もが願っている。

「運動競技」を語る人類の古典『イーリアス』は、「怒りを歌え、女神よ、ペーレウスの子アキレウスの、・・・」という言葉から始まる。冒頭におけるアキレウスの怒りは、ギリシア軍の悲劇の原因として語られる。彼は、味方総大将のアガメムノンの状況判断に怒り、敵トロイア軍との戦闘へ参加しない決断をする。ギリシア軍最強である彼のこの怒りは敵トロイア軍に有利な情勢をもたらし、戦争が長期化する原因となる。胸に槍が刺さり、首が転がり、身体が地に崩れる。花咲く大地に血が注がれ、勇将たちの多くは、故郷の家族を思うが、戦場から帰還することはない。しかし、この冒頭における彼の怒りは、トロイア軍にとっては歓迎すべき怒りである。

ところが、物語後半(全24書中の第22書)における参戦後のアキレウスの怒りは、残酷であり、動物以下の振る舞いとして語られている。敵総大将ヘクトールは、死闘を繰り返し、アキレウスの怒りに敗れ、トロイア城の周りを引きずり回される。敵総大将の父プリアモスは息子の戦死を城内から眺め、茫然自失に陥る。古典の読者たちは、この場面におけるアキレウスの怒りの非情さに地獄の人間の醜さを直視することになる。怒りが、この世における人間たちの苦痛、破滅、悲劇の原因となることを教えられる。

しかし、第 24 書において、鬼神のごときアキレウスの怒りは止み、気品ある彼の行動が語られる。主神ゼウスの計らいにより、父プリアモスが単身で敵陣アキレウスのもとへ、息子の遺体を引き取りに来る場面がある。わが身のことは捨て去り、息子の遺体返却を懇願する父の心、この心に打たれたアキレウスの怒りは崩れ、鬼の眼から涙がこぼれる。戦争の悲劇、人間の命の儚さを自覚した英雄は、息子の遺体を父プリアモスへと返却し、怒りから解放されることになる。

剣道でも、人間の心を打つ「打ち」が大切にされている。お互いの懸命な汗の中で、そのような一本がこの世に現れることを祈っている。刀による闘争においても、怒りに囚われた戦いではなく、人格が人格に対峙した勝負があったはずである。生死を超えた懸命な勝負である。日々の工夫と実践によって練り上げられる「打ち」は、この世における人格ある「打ち」の実現にあるのかもしれない。

(小林 日出至郎 hinode@ed.niigata-u.ac.jp)

体育哲学考

教員養成科目としての「“体育哲学”的授業科目」の中身 森田啓之（兵庫教育大学）

私が勤務する関西圏では、ここ数年、体育・スポーツ学部/学科の新設により、保健体育免許に必要な科目として「“体育哲学”的科目」の授業をしてほしいという要望が多い。その科目名は、「体育原理」「スポーツ原理」、あるいは「体育・スポーツ文化論」と様々であるが、「体育原理」が免許の必修から外れた現在においても、その必要性が少なからず認識されていることは、この領域に関わるものとして嬉しい限りである（ただ、新しく専任教員を募集するのではなく、非常勤講師で授業をというのは残念である）。

言うまでもなく、体育哲学的な原理は「体育実践の架け橋となる諸原理を統括する、根本的原理」であり、保健体育教員/スポーツ指導者を志す学生には、是非ともその必要性とともに、具体的な中身を理解してほしいと考えるのは、私だけではないだろう。しかしながら、一般にはその重要性と裏腹に、学生の興味・関心度は必ずしも高くないと感じるのも、私だけではないだろう（例えば、授業に即発されてゼミを希望する学生が他分野に比べてそう高くはない等）。その意味においては、本表題にあるように、学生に伝わる「哲学的内容、及びその伝え方」について、今後考えることも必要ではないだろうか。

それを考える一つのヒントとして、以下のコメントを引用したい。他領域の先生であるが、私の尊敬する先生が、本学の教務に関する会議でかつて発言されたものである。

大学（学部）で教える内容は、教員個人の研究成果の反映でももちろん良いが、特に教員養成に関わる科目の中身は個人の趣味・嗜好で扱われては困る！学部には、「教員の専門」を教えるのではなく、教育実践に関わって不可欠なもの（敢えて誤解を恐れず、その先生は「概論」とおっしゃられた）を押さえるべきである、と。

私なりに解釈すれば、自分が面白いと考える内容ではなく、実践者の立場にたった課題設定をするべきであるということだろう。以降、自分が担当するこの授業において、これから体育実践に関わっていく学生に対する必須の教育内容・事項は何か？と問い続けながら授業を試みているが、まだ決定的な答えには至っていない。ただ、学生の反応（卒業してからの会話の中で、彼らの記憶に鮮明に残っていると思われること）からして、その中身として重要と思えるものは、今のところ、次の2つである。

一つは、「運動部活動と保健体育授業の相違」で、「専門体育・普通体育」（佐藤臣彦先生によ

る)の категорияで具体的に演習等をしながらの議論である。今も昔も、体育・スポーツ分野を志す学生のほとんどが、将来、運動部活動やスポーツクラブの指導者になりたいという強い動機を持っているが、学校教育という制度内での教科体育や課外体育の方向性をしっかり認識してもらうことは、学校体育の今後を担う上で不可欠だろう。

もう一つは、「指導とは、教育とは、体育とは？」に関して、プラトンの「洞窟の比喻」を用いて、教育や体育の難しさや面白さを考えさせた部分である。私自身が学生時代にその深い意味を知って衝撃を受けたことを覚えているが、今の学生にとっても少々難解な文章でありつつも、教育や体育の本質を考えるうえで、素晴らしい題材である。

両者とも若い感性の頃の自分自身に染み込んだという思いがあるので、教え方に熱が入っているからかもしれないが、これらが今の学生にとっても「心に響く」体育哲学的授業の一つになりうることは間違いないと感じている。今後、体育哲学的知見の生産とともに、教壇での授業内容の具体について、先輩・後輩諸氏と情報交換を進めていきたい。

(森田啓之 hmorita@hyogo-u.ac.jp)

私の研究

日本剣道の伝播(国際化)と文化変容を考える

小田佳子(東海学園大学)

‘ Can you explain or show us about *Zan-shin* of *Kendo* here? ’

2年前、オリンピック青少年記念総合センターで開催された、日本スポーツ教育学会第30回国際大会において、近藤良享先生(中京大学)が投げかけたこの質問が、私にスポーツ哲学分野という新たな学術との出逢いを与えてくれました。

それまでは、小学1年生の頃から続けている剣道に携わり、金沢大学教育学部を卒業して、教職に就き、中学校で英語と保健体育の教科を担当し、部活動では剣道を指導してきました。大学院には在職のまま通い、大学教育と小・中・高までの現場教育との乖離に疑問を感じ、「剣道と国際化を考慮した教科教育」の研究に取り組みました。そこで日本スポーツ教育学会に参加させていただくようにもなりました。

ご縁あって、愛知県の東海学園大学に保健体育の教職課程に関わる職を得ました。そこで、改めて、私自身のこれからの研究の方向性を考えた時、私の脳裏に浮かんだものは、新たに導入された中学校の保健体育科での武道必修化の意義(我が国の伝統文化の尊重)と、これまで関わってきた留学や在外教育施設の在職中にイギリス、オランダ、ドイツなど、ヨーロッパ諸国での剣道の経験を通した、剣道をどのように国際化していくべきかでした。

スポーツ哲学分野という新たな学術との出逢いととともに、私が長年関わり続け、そして教育的価値のあるものとして子供たちに伝えようとしている剣道とは、いったい何なのか？ スポーツなのか？ 武道なのか？ また、日本の伝統文化とは、いったい何なのか？ では、剣道が日本を出て、海外で伝播していくときには、そこには何が起こるのか？ このような疑問が次々と溢れ出しました。

国内の剣道大会に参加すれば、「剣道は、世界に誇るべき素晴らしい日本の伝統文化です。」と開会式の大会長の挨拶や来賓の祝辞に用いられ、参加者である子供から大人、そして観覧席で観戦する家族・関係者が、心地よい挨拶に共感・共鳴します。しかし、「剣道の何が世界に誇るべき伝統文化なのか」を明確に説明できる実践者や専門家は多いとは言えません。そして、こうした疑問を問うことなしに、日本から伝わった剣道は KENDO として、世界各地で「大会(競技)」が開かれています。剣道の国際化について概説すると、1970年に国際剣道連盟(FIK, 当

時は IKF) が、「剣道の国際的普及振興をはかり、合せて剣道を通じ加盟団体相互の信頼と友情を培うことを目的とする」とし、17 カ国・地域の加盟で結成され、第 1 回世界剣道選手権大会 (WKC) が日本で開催されました。以後 3 年に 1 度、世界の各都市で WKC は開催され、2012 年 5 月には、イタリアで第 15 回 WKC が開催されました。そして 42 年余りの歴史を刻んだ現在は、53 カ国・地域が加盟・参加し、さらにその他の未加盟国を合計すると世界の 100 カ国・地域近くに剣道が伝播しています。

しかし、今まさに世界各地に伝播したことによる国際化の波が日本剣道に押し寄せているともいえる状況があります。特に、大きな波となって押し寄せているのが韓国です。奇しくも「剣道の黒船・韓国」とアレキサンダー・ベネットはこれを形容しています。韓国剣道の台頭は 1980 年代に顕在化し、WKC の男子団体戦で日本チームと決勝を争うこと 8 回、女子団体戦では既に連続 4 回、日本チームと優勝を争っています。また、近年では、剣道の歴史と文化性をめぐる宗主国論争の様相も出現し始めました。

一般的に、ある伝統文化の伝播/伝承/受容には摩擦、軋轢が生じることは文化人類学の知見ですが、これと同じく、日本の伝統文化である剣道が世界各国に向けて伝播していく過程にも、様々な文化摩擦や軋轢が生ずることは間違いありません。

そこで、私の現在の研究課題は、これまでの日本剣道の伝播 (国際化) がどのように展開してきたか、世界各地で変容してきたのかを研究することです。そして、これからの剣道 (KENDO) のあるべき方向性を考察することを目的とします。

以下のような手順と内容に従って、研究をすすめたいと考えています。

1. 日本の伝統文化としての剣道とは何か。現代剣道の概念と先行研究から検討する。
2. 「国際的な剣道の競技化」について、その現状と課題を探る。
3. 「競技化された剣道」に着目し、「伝統文化を国際的に (オリンピック競技化) 展開した類似競技」として、「柔道と JUDO (1964 年 (男子), 1992 年 (女子))」と「テコンドーと TEKONDO (1988 年から公開種目, 2000 年から公式種目)」の 2 つの競技について、その伝播と文化変容の経緯を検討し、この結果と日本剣道 (KENDO) ・韓国剣道 (KUMDO) の文化的異同・差違を解明する。
4. 「日本剣道の国際的伝播の変容」として、世界各国に伝播した剣道について、まずは、韓国剣道 (KUMDO) に着目し、次いで台湾などのアジア圏、そしてイギリス、ドイツ、オランダなどヨーロッパ圏、そしてアメリカ圏などの各国の歴史と実態を調査し、それぞれの現状と課題の比較検討を試みることをライフワークとしたいと考えています。

(小田佳子 odak@tokaigakuen-u.ac.jp)

書籍紹介

石黒浩(2011)『どうすれば「人」を創れるか アンドロイドになった私』(新潮社) 高橋浩二(大阪産業大学)

著者の石黒浩は、大阪大学大学院基礎工学研究科教授であり、ロボット学 (彼は、「ロボット工学」ではなく、ロボットを開発することで人間を理解することを目指しているという意味で「ロボット学」という名前を使っている。) の専門家である。彼は、『クローズアップ現代』(NHK, 2011 年 1 月 12 日放送) 等のメディアに取り上げられる等ご存知の読者の方々も多いだろう。ロボット製作を通じて、彼はなぜ「人を創る」ことにまで思考が拡大したのか。

アンドロイドとは人間酷似型ロボットのことである。石黒は、「アンドロイドは自分を表面的に映し出す単なる鏡 というだけではなく、その根底に潜む『人間とは何か』について深く考えさせてくれる、いわば心の内面までも映し出す心の鏡であった。」という。当初、

彼の目標は日常活動型ロボットを作ることであった。彼はその特性を「人との関わり」に求めている。また、これまでのロボットは「見かけ」に問題があったという。人との関わりにおいてロボットの「見かけ」は、「動き」と同様に重要であり、彼は日常活動型ロボットの究極のデザインを探る。その結果、「ロボットの究極の姿形は人間ということになるのではないだろうか。人間の脳は人間と関わるためにあり、人間と関わる物はいずれも、どこかに人間らしさを持つのである。」という考えに至る。

彼は、まず子供のアンドロイドを作ったが、「不気味の谷」という問題に突き当たる。これは、ロボットが人間に非常に近づいたある瞬間、とたんに親近感が損なわれ、不気味に見えるすき間のことである。この原因は、見かけと動きのバランスにあると言われている。それを克服するために彼は、人間らしい動作が再現できる複雑なメカを埋め込める大人の体を持つアンドロイドを開発することになる。それがジェノミノイドである。このジェノミノイドは、「自律的な対話をあきらめ、先の日常活動型ロボットと同様に遠隔操作によって対話する機能を実装した」ものである。すなわち、オペレーターによる操作を通じて「人との関わり」を持つアンドロイドである。彼は、このジェノミノイドを操作して人に関わった際に感じた内容について次のように言及している。すなわち、「ジェノミノイドの興味深かった点は、オペレーターの私もジェノミノイドと対話する訪問者も、しばらく話をすると、このジェノミノイドを私の体のように感じた点である。」ということである。どちらか一方がジェノミノイドを「本人」と感じるのではなく、両者がそのように感じるということは、どこにアイデンティティを感じているのか。彼によれば、「私は『ジェノミノイド』の体を使えば、遠隔地に存在することもできることになるわけである。」となる。「私」という存在様態について考えさせられる言及である。

我々は、身体(肉体)をアイデンティティのよりどころとしている場合がある。例えば、「私が今ここにいること」を証明しようとする場合である。しかし、彼の体験では、ジェノミノイドが「私の体」のように感じてしまうのである。しかも、それは一方ではなく両者共にそうである。彼は、身体の定義について問題を提起する。すなわち、「人間とは、もはや身体で定義されるものではない。手足がなくとも、義手や義足を使えばよい。さらに技術が発展すれば、そのほかの体の部位も機械に置き換えられ、たとえ、ほとんど機械化した体を持った人間になったとしても、人間として社会に受け入れられる」のである。この「肉体からの解放化」を極端に進めたのが、ジェノミノイドであり、サロゲートである。サロゲートとは、アンドロイドとブレイン・マシン・インターフェースを組み合わせた脳波による遠隔操作型アンドロイドである。2009年にはアメリカで『サロゲート』という映画が公開されている。さらに彼は、「肉体にアイデンティティを求める時代は明らかに終わった。近い将来、脳の一部または、全部が置き換えられてしまうかもしれない」と主張する。これはSF小説の世界ではない。強烈である。彼は、人間の定義について自らの意見を述べる。すなわち、「人類は、新しい技術を発明するたびに、人間の定義をより深化させてきた。人間とは、単に肉体によって定義されるものではないことを実証してきたのである。このように、技術の進歩とともに、より深い人間の定義を求めることこそが、技術によって進化する人間の存在価値であり、人間として生き続けることの真の意味だと、私は考えている」。これは、技術的側面からの言及ではあるが、我々は彼の主張を真摯に受け止めなければならない。

この「アイデンティティ」について、興味深い言及がある。彼は、自分の姿形をしたジェノミノイドを作成し、「ジェノミノイドと見かけ等が、同じでないといけないという強迫観念がつきまとうようになったことは確実にいえるかもしれない。」と述べている。また、女性ジェノミノイドFのモデルについても、「Fのモデルは、ジェノミノイドFを見て、自分のお手本が

いると言う。肌も綺麗で背筋も伸びていて、常に冷静に凜として座っている。感情に左右されやすい女性からすれば、感情をうまく抑えているように見えるアンドロイドは、ある意味理想の精神状態を持っているように見えるのかもしれない。」と報告している。興味深いことは、彼やFのモデルがジェノミノイドを理想とし、それに劣らないように自らの姿形を変えようとしていくことである。石黒自身は、ジェノミノイドに比べて「太った」と指摘され、腹筋運動を始めることによって、ジェノミノイドよりシェイプアップし、優越感を感じている。さらに、ジェノミノイド完成の5年後に修理等が必要になった際、容姿について「ジェノミノイドに自らを合わせ」た。彼の場合は美容整形である。Fのモデルについては、ジェノミノイドFの完成後の1年程度からジェノミノイドと自らを比較し、容姿等や「若さ」をジェノミノイドに合わせる行動をしている。彼女の場合は、短く髪を切る等であった。以上の報告から、彼らのアイデンティティのよりどころが「ジェノミノイド」にあった、と捉えることができる。彼自身も、「見かけ以外のものに強いアイデンティティがある場合、生きていく限り、社会において人前に出ている限り、そのアイデンティティに付随する見かけは、常に社会の中で更新されていくのかもしれない。」と述べ、「私の研究成果ではあるが、見かけが意味を持つ研究成果であるために、半分映画スターのアイデンティティに似たアイデンティティを持ってしまっている。この呪縛から自らを解放するためには、今若返った自分にもう一度冒険をさせて、新たなアイデンティティを、見かけとは無関係なアイデンティティを獲得するしかない。」と述べている。

現在の彼の研究は、ジェノミノイドの開発からテレノイドの開発へ興味を移している。テレノイドとは、「見た目はもちろんのこと、触ってもその感触は人間のようであり、明らかに人間のようなのは間違いないのであるが、それでいて年齢も性別もわからない。我々が日常において、そのようなものを見る機会も触る機会もない代物」である。ジェノミノイドと比較して「外見としての人らしさ」は失せている。その代わりに、常に「ニュートラル」であろうとする。我々は、そのニュートラルな見かけであるテレノイドを「誰であるか」一生涯特定しようとするそうである。

エピローグで彼は、テレノイドに続く「何か」を創っていきたいと述べ、「人間には非常に重要であるが、何であるか未だによく分かっていないことが多い。『意識』『情動』『感情』『魂』『心』、等である。」とし、それを「ロボットやアンドロイドを作ることによって、ありありと感じられるようにしたい」と言う。我々は、体育学の研究者として「人間」に対して何ができるのか。「見かけ」や「動き」だけに囚われない研究者として育つことができるのか。そして「人間とは何か」を問い続けなければならない。

(高橋浩二 takahashi@spo.osaka-sandai.ac.jp)

箱根合宿研究会に参加して

親泊亜貴子(千葉大学大学院)

今回、初めて箱根合宿研究会に参加し、様々な発表を聴かせていただいたことは、大変勉強になりました。多くの場面で刺激を受け、自分自身の研究に対する姿勢や詰めの甘さを痛感すると同時に、研究への意欲がより一層高まりました。

研究発表会では、多種多様な洗練された発表が行われ、発表を聴く度に多くのことを考えさせられました。体育哲学を専門とされる研究者の方々が集まった会だからこそ、新しいものの見方や捉え方を学ぶことができるのだと感じました。また、発表に対する先生方のご指摘には、感銘を受けました。発表内容の重要な点を見定めた上で、今後の研究に活かされるようなご指

摘をされていたことは、非常に勉強になりました。夜の懇親会では、学問についてだけでなく、それ以外についてもお話しいただき、楽しい時間を過ごすことができました。未熟な私にとって、経験豊富な先生方のお話は、非常に興味深くためになりました。

自分自身の研究発表についても、多くのご指摘、御助言をいただきました。今回、「体育・スポーツにおける『身体的対話』再考」というテーマで発表しましたが、研究について一面的にしか捉えていなかったことや着眼点にずれがあったことなど、今回のご指導によって気付かされた点が多くありました。特に、体育やスポーツでこそ可能となる「身体的対話」についての考察が不十分であったため、多くの示唆をいただき、着眼点を広げることができました。さらに、発表後も指導していただき、先生方の持つ幅広い知識や視点の鋭さ、そして温かさを感じました。発表内容について迷っている点が多く、不安を抱えたままの発表でしたが、意を決し発表してよかったと思っています。また、同じ大学院生として共に学ぶ仲間が、迷いながらも、様々な切り口から教育や体育、スポーツについて向き合おうとしている姿は励みとなりました。今回の貴重なご意見を、1ヵ月後に控えた日本体育学会での発表や今後の研究に活かしていけるよう、日々精進していきたいと思っています。

最後になりましたが、私の研究のキーワードとして「対話」があります。「対話」とは、単なる「会話」とは異なり、お互いに向き合って語りかけ合い応え合うような、人間にとって不可欠なやりとりであると考えています。今回、多くの先生方や大学院生と接する機会をいただき、共に学び、高めあうことを通して、この「対話」の大切さを改めて実感させていただきました。これまで以上に、仲間と共に切磋琢磨し、勉学に励んでいきたいと考えています。今回のようなすばらしい会に参加させていただいたこと、この場をお借りして、改めて御礼申し上げます。

(親泊亜貴子 lui-z-0524@hotmail.com)

運営委員会からのお知らせ

新保 淳(静岡大学)

今年度の日本体育学会(於:東海大)に関する情報

「体育哲学専門領域企画」と「口頭発表プログラム」の日程についてお知らせいたします。

8月22日(水)

口頭発表1

座長:新保 淳(静岡大学)

10:30~11:00 跡見 順子(東京大学)重力健康科学からの体育原理・身心関係・健康基盤の再構築(その三)・細胞・身体の不安定性の二階層と制御要求性から探る「知の身体性」基盤

11:00~11:30 志々田 文明(早稲田大学)「柔道と剣道の合体」の術理・嘉納治五郎の言説の意味

11:30~12:00 高橋 徹(国士舘大学大学院)体育学研究におけるプラグマティズム思想の再評価

口頭発表 2

座長：加藤敏弘（茨城大学）

13：00～13：30 藤澤 良彦（仙台大学大学院）体育における教育的可能性の一端に関する検討・シュプランガーの覚醒論に基づいて

13：30～14：00 森田 啓（千葉工業大学）学生が授業運営を行う体育・スポーツ科目・教養教育としての大学体育

14：10～16：10 シンポジウム A

体育における評価を問う（2）・評価の対象と方法を問う

司会：深澤浩洋（筑波大学）、森田啓（千葉工業大学）

演者：

（1）学習評価としてのコミュニケーション：鈴木直樹（東京学芸大学）

（2）表現運動・ダンス領域における評価：大橋奈希左（上越教育大学）

（3）ボールゲーム教材における評価：吉永武史（早稲田大学）

8月23日（木）

口頭発表 3

座長：石垣健二（新潟大学）

09：30～10：00 親泊 亜貴子（千葉大学大学院）非言語的なやりとりの基盤としての身体性・体育の独自性の明確化に向けて

10：00～10：30 坂本 拓弥（東京学芸大学大学院）体育教師の「指導言語」再考・現象学的知覚論を手掛かりに

10：30～11：00 岡田 悠佑（早稲田大学大学院）中村敏雄の学校体育論の思想的出発点における課題の検討・教科内容論の形成過程に着目して

口頭発表 4

座長：河野清司（至学館大学）

13：00～13：30 下山 竜良（早稲田大学大学院）わが国における「スポーツ浄化」運動に関する研究

13：30～14：00 田中 愛（武蔵大学）アダプテッドスポーツの教材的意義・一般大学生のスポーツ実践を促進する試み

8月24日（金）

09：30～11：30 シンポジウム B

身体知研究の現在・身体教育の可能性を探る・

司会：釜崎 太（明治大学）

演者：

田中彰吾（東海大学：理論心理学）「身体知の哲学」

生田久美子（田園調布学園大学：教育哲学）「『わざ言語』は何を目指すのか・感覚の共有を通しての学びへ」

樋口 聡（広島大学）「身体知研究と『体育』のゆくえ」

口頭発表 5

座長：三原幹生（愛知教育大学）

13：00～13：30 坂田 卓也（東海大学大学院）レジャーの近代化に関する一考察・「遊び心」の喪失・変容

13：30～14：00 舛本 直文（首都大学東京）オリンピックの価値論・何故「平和」はオリンピック価値に含まれないのか？

14：00～14：30 大峰 光博（早稲田大学大学院）野球における報復的死球の是非に関する研究・McAleer と Dixon の所論に着目して

体育哲学専門領域メーリングリストへのご登録のお願い

メーリングリストへ登録済みの方へはメーリングリストによって会報が配信されております。速報性、経済性、専門領域活性化の観点から、是非ともご登録をお願い申し上げる次第です。以下のような手順で登録できます。

- 1) グループへ参加するには、事務局：新保（ehashin@ipc.shizuoka.ac.jp）までご一報ください。事務局にて登録の手続きをさせていただきます。
- 2) 登録完了後、taiikutetsugaku@yahoogroups.jp を用いてグループメンバーにメッセージを配信することができます。

なお、異動等の関係でメールアドレスに変更があった場合は、速やかに事務局までお知らせ下さい。宜しくお願いいたします。

（新保 淳 ehashin@ipc.shizuoka.ac.jp）

次号は研究情報などの内容でお届けする予定です。投稿を下されます方は釜崎太（kamasaki@meiji.ac.jp）までお問い合わせ下さい。

体育哲学専門領域会報第 16 巻第 2 号

発行者 日本体育学会体育哲学専門領域

大橋道雄（会長）

編集者 阿部悟郎（広報委員長）

発行日 平成 24 年 7 月 26 日

連絡先 989-1693 宮城県柴田郡柴田町船岡南 2-2-18

仙台大学体育学部

0224-55-1147（直通）

アドレス：gr-abe@scn.ac.jp

【編集後記】

列島各地に、猛暑やら豪雨やら、梅雨明けやら梅雨寒？やら。そんな中、年度大行事の一つ、箱根での夏期合宿研究会が盛会裏に終了。企画・運営ご担当の F 澤先生に感謝。さて、次なる山は日本体育学会。若手研究者の登壇が多いのが嬉しい。シンポジウムも刺激的。方々、彼の地、平塚でお会いしましょう。K 保先生と O 津先生（と大学院生の S 田さん他）には、お世話をおかけします。わが領域のプログラムが順調に進行し、これまた盛会でありますよう。（A u. KMSK 拜）